

---

# 歌よ届け大切なあなたに

星野由香里

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

歌よ届け大切なあなたに

### 【Nコード】

N4547Z

### 【作者名】

星野由香里

### 【あらすじ】

昔会ったことのある2人。でもそれは・・・出会いと別れであった。

ある少女の歌は大切なあなたに届くのだろうか？

s o n g O 登場人物（前書き）

初めてのオリジナル小説です。  
ぜひ、読んでください。

## songo

## 登場人物

佐藤亜由美

花岡高校1年生。

ある、少年を探しにやってきた。

歌を歌うのが得意。

将来、シンガーソングライターになるのが夢。

高橋昂

花岡高校1年生

亜由美のことを知っている。

亜由美の初恋の相手。

サッカー部に所属。

亜由美のことが気になっている。

将来サッカー選手になるのが夢。

水野真紀

花岡高校1年生

昂の幼馴染

昂のことが好き

演劇部に所属。

将来女優になるのが夢。

藤村翼

花岡高校1年生

昂の幼馴染

亜由美に会って一目ぼれする。

昂と同じサッカー部に所属。

昂と同じサッカー選手になるのが夢。



s o n g o

登場人物（後書き）

初めてのオリジナル作品なので、ぜひ、お読みください。

song 1 出会い

ある少女がやってきた。

初恋の相手を探すために……

「わーここが花岡町か……すごいな。」

そう、この少女が……

佐藤亜由美。

天才少女だ。

「歌でも歌おう。」

君がいて僕がいる  
僕がいて君がいる  
大好きだよ

君へ」

「なんだ、このきれいな歌は？」

「あ、・・・・・・・・あれは亜由美？」



「すみません、花岡高校に行きたいんですけど、道わかりますか？」

「ああ、君の歌すごいね。うまいよ。」

「へたくそですよ。お名前は？」

「高橋昴だ。昴って呼んで。」

「うん。私は佐藤亜由美、亜由美って呼んで。」

「なあ、亜由美何でこの町に来たんだ？」

「えっと、初恋の人を探しに来たんだ。」

「初恋の人って？」

「それが……初恋の人の名前わからないんだ。すばるっていうんだけど……」

「そうなのか。全然気づいてないのか。」

「何か言った？」

これこそが佐藤亜由美と高橋昂の出会いであった。

学校

「ホームルーム始めるぞ。転校生が来てるぞ。入れ。」

「初めまして、隣町から来た、佐藤亜由美です。趣味は音楽です。」

「これからよろしくお願いします。」

「あーーーーー昂君!？」

「おーーーー亜由美じゃねえか。」

「嬉しいな。よろしくね。昂君。」

「ねえ、昂、あの人って誰？」

「俺の初恋の人だ。」

「え、初恋の人いたの？」

「ああ、昔にあったんだ。」

「なあ、水野どうした？」

水野真紀は実は・・・高橋昂のことが好きだった。

甘くてせつない恋が始まることとしていた

放課後

「なあ、昴君、校舎案内してくれない？」

「いいぜ。そのかわり・・・」

「その代り、俺の前で歌ってくれよ。」

「いいけど、なんで？」

「亜由美の歌が好きだから。」

「嬉しい、生まれて初めて言われた。」

「いいよな？」

「うん。」

学校案内終わり

「どこで歌おうかな？」

「どこでもいいぜ。」

「あ、あそこで歌うね。」

「ああ。」

「悲しみは終わる日が来るから  
希望を持って生きていこう  
くじけても前に進もう  
光があるから」



前に、前に進んで行こう

明日に・・・」

「どうかな？」

「よかった。感動した。」

「嬉しい。ありがとう。そつだ、昂君の夢ってなに？」

「俺は・・・サッカー選手。亜由美は？」

「シンガーソングライター、変だよな。」

「いや、いいんじゃないか。」

「ありがとう、初めてほめてくれたから。」

「え。」

「私、夢バカにされて生きてきたんだ。」

「そうだったか・・・」

「でも、あきらめない。歌うのが好きだから。」

「お互いあきらめずに頑張ろうな。」

「うん、ありがとう昴君。初恋の人となんか似てるな。」

「そりゃあだつて、俺だもん。初恋の相手。」

家の前

「送ってくれてありがとう、また明日。」

「ああ。」

そうやって一日が終わった。

song 4 歌

家に帰った亜由美は……

風呂に入っていた。

「今日はよかった。昂君に案内してもらえて。何かお礼したいな。考えよう。」

風呂上り……

「あー今日も疲れた。明日も頑張らなきゃ。シンガーソングライターになりたいな。」  
初恋の人も私のこと覚えてるかな？」

「寝よう、お休み。」

朝

「やばい、遅刻しちゃう。急げー」

「あ、おはよう昴君。」

「おお、亜由美おはよう。」

「あの……その人って誰？」

「あ、あたし、水野真紀っていうの。真紀って呼んで。亜由美って呼んでいい?」

「うん。真紀ちゃんって呼んでいい?」

「うん、これからもよろしくね。」

「おはようみんな。」

「おはよう、佐藤さん。」



「ねえ、佐藤さん、昴君とはいったいどんな関係なの？」

「え、友達だよ。」

「なんだ。そつだ亜由美って呼んでいい？」

「もちろん。」

「あ、屋上行こう。そこで歌おう。」

屋上

「あーよく寝た。」

「あれ、何か聞こえる。」

「君がいて僕がいる  
僕がいて君がいる  
愛してる、愛してる

君へ」

「あ、人がいたの！」

「あんた誰？」

「最近引越してきた、佐藤亜由美って言います。あなたは？」

「俺は藤村翼、よろしく。」

「翼君って呼んでいい？」

「ああ、俺は佐藤って呼ぶな。」

「うん。」

「あ、いた、亜由美どこにいたんだ？」

「ごめんなさい、屋上に行きたかったの。」

「おい、昴、佐藤のこと知ってるのか？」

「ああ、」

「なんだ、お二人ともお知り合いだったんだ。」

「ああ。」

藤村翼は佐藤亜由美に恋をした

甘くて切ない恋を・・・

とうとう、合唱コンクールの時期がやってきた

「亜由美って、ソロ歌える?」

「歌えるよ。」

「そうだ、亜由美の歌聞かせてくれない?」

「いいよ。」

「君がいて僕がいる

僕がいて君がいる

愛してる

愛してる

大好きな君へ」





放課後

「昴君、そんなによかったのかな？」

「ああ、よかったと俺は思う。」

「ありがとう、昴君に言われると勇気出るよ。」

「そうか。」

「ありがとう。また明日。」

「おう、また明日。」

っと一日がおわっていった。

SONG 合唱コンクール

とつとつやってきた。

合唱コンクール

「みんな、頑張るよ、エイエイオー」

「続きまして1・6の番です」

「君がいて僕がいる  
僕がいて君がいる  
愛してる  
愛してる  
大好きな君へ」



「昴君勝ったよ。嬉しすぎて涙が出てきちゃった。」

「泣くなよ、ほれハンカチ。」

「あり……がとう。」

こうして合唱コンクールは終わった



やっと終わった。

家

初恋の人もしかして・・・

昴君かな？

不思議そうに思った亜由美であった

song

好きっていつ気持ち

合唱コンクールの数日後……

佐藤亜由美は悩んでいた。

(あーあ、初恋の人って誰だろう？わかんない)

「ねえ、亜由美何か悩んでるの？」

「真紀ちゃん。」

「あたしでよかったら相談にのるよ。」

「わーん真紀ちゃん。実はさ……」

「なるほどね。難しいね。」

「真紀ちゃんは好きな人いないの？」

「いるよ、大切な人が……」

(モヤモヤする。)

「どうかした？」

「あ、昴、来たの。」

「ああ、危うく遅刻しそうだったぜ。」

（あんなに仲がいいんだ、ズキ、何で胸が痛いんだろうか？）

授業中

わかんないよ、何であんなに胸が苦しくなるの？

あたし真紀ちゃんにやきもち焼いてるの？

もうわかんないよ

っと心の中でつぶやいていた

授業終わり

やっぱり、昂君と真紀ちゃん仲がいい。



「おいどうした亜由美？」

「ううん、なんでもない。」

(もしかしてあたし……………昂君のことが……………好き?)

「ねえ、昂君聞いていい?」

「なんだ?」

「もしかして私の初恋相手って昂君?」

「それは言えない。」

「何だよ教えてよ。」

「今は言えない。」

「もじい。」

亜由美は走って逃げてしまった。

その所を翼が目撃した。

もうわかんないよ。

胸が痛いよ

助けて・・・

悲しむ亜由美であった

s o n g s

過去part1 (前書き)

真紀目線です。

song 過去part1

あたしには好きな人がいる

それは……

高橋昴

幼馴染の大切な人

でもその人にも好きな人がいる

それは・・・

佐藤亜由美



昴の目の前に現れた

そう、昴の初恋の相手

でもねでもね、好きなの

昂のことが……

大好きなの。

いっつも優しくてかっこいいあたしだけのヒーロー

でもね、あたしの方には向いてくれない

好きだよ、昴

世界の誰よりも……

愛しています

昴、あたしの気持ちは届いていますか？

大好きな気持ち

とっても大事な気持ちが・・・

あなたに届いていますか？

届いてほしい

この気持ちが・・・

contents 告白(前書き)

とうとう真紀が.....

song 告白

文化祭の準備が始まっていた。

亜由美たちのクラスは……男女逆転メイド喫茶であった。

しかし、亜由美と昴の距離はなかなか縮まらなかった。

クラスの女子が騒いでいた。

「亜由美、男装似合ってるよ。」

「真紀ちゃんこそ。似合ってるよ。」

「きゃー昴君が女装、かわいい。」

「かわいい、言うな。」

「昴顔真っ赤だよ。」



「うるせえぞ、水野。亜由美も見ろな。」

「だってかわいいもん。ね、亜由美。」

「ううん。」

「何か鼻とあつた？」

「ううん、何にもないよ。」

「ねえ、真紀ちゃん私、明日大丈夫かな？」

「大丈夫だって。人気あるんだあら。」

「そうかな」

「自信持ちなさいよ、亜由美。」

「うん、ありがとう。」

文化祭前日の放課後

「  
「  
「  
「  
みなさん明日頑張りましょ  
「  
「  
「  
「

「あ、真紀ちゃん先に帰ってきてくれない？」

「わかった。」

「んじゃあね。」

「うん。バイバイ。」

帰り道

「ねえ、昴、もしかして亜由美のこと好きなの？」

「ああ。」

「そっか、あたしも言いたいことが……」

「なんだ？」

「あたし、昴のことが好き、付き合ってください。」

「えーーーーー」

「気づいてなかったのね。」

「ああ。でも、亜由美のことが好きなんだ。」

「そろそろね、ありがとう。また明日。」

「ああ。」

真紀は一人かえって行った。

## 真紀の家

「ただいま、お母さん。」

「おかえり真紀、どうしたの？」

「なんでもない。」

ドタバタ、ドタバタ

「フツねちゅったよ。」

「あー……、……ひゅんひゅん。」

「でも告白できてよかった。」

「亜由美、昴頑張った。」

「じつして一日が終わった」



とうとう文化祭初日目が始まるうとうとしていた

亜由美たちのクラスは……

「みなさん頑張りましょう」

「「「「「おー—————」」」」」

円陣をくんだ

1 - 6

「おかえりなさいませ、お嬢様。」

「きゃー、あの子かっ」いい。」

「亜由美、人気だね。」

「そうかな、お客様来たよ。」

「昴君言っつてよ。」

「おかえりなさいませ、ご主人様。」

「キヤーあの子もかわいい。」

「昴モテるね。」

「うっせえ。」

### 休憩時間

「昴、亜由美これに行っつてきてよ。」

「何？」

「お化け屋敷化。」

「あたし、シフト入ったからいけなくなっちゃった。」

「わかった。」

亜由美と昴はお化け屋敷に行った。

亜由美は女の恰好に戻って行った。

お化け屋敷

「昴君この前はごめんね。勘違いだった。」

「こっちこそ泣かせてごめん。」

「あれ、昴君どこ？はぐれちゃった。きゃ、ごめんなさい。」

「よお、姉ちゃん、かわいいね、俺らと遊ばない？」

「連れがいますから……」

「いいじゃんかよ。」

「離して。」

「すみません。」

「なんだ、お前。」

「こいつの連れ何で。」

「すみませんでした。」

ナンパした男は逃げて行った。

「ありがとう、昴君。」

「いや、別に。」

（こんなの、卑怯だよ、昴君誰が好きなの？教えてよ。）

2人の距離はグンと縮まった



「よお、昂、」

「なんだ、翼じゃねえか。」

「おい、この前佐藤泣かせただろ。」

「ああ。」

「お前。佐藤のことが好きなのか？」

「ああ、好きだ。」

「どうして泣かせたんだよ。」

「それは……………」

「決着つけようぜ。」

「何で？」

「俺は佐藤のことが好きだ、あいつを泣かせない。」

「いいせ、勝負受けるぜ。」

「んじゃあ、告白大会で告ろう。」

「ああ。」

男たちの熱い戦いが始まった

s o n g 1

過去 part 2 (前書き)

昂目線です。



song 1 過去part 2

俺には初恋の人がいる。

その人は……………

佐藤亜由美だ。

昔その女の子と遊んだことがある。

その女の子は両親を亡くした

でも、その女の子は懸命に笑っていた。

苦しいのに、悲しい感情を抑えていた

あるとき、その女の子は泣いた

ずっとつらかったんだろっな

だから俺が守ってやりたい

笑顔が見たい

そう思ったんだ

亜由美を決して一人ぼっちにさせない。

この俺が守ると……

だから、待っていてくれ。

ちゃんと伝えるから

好きだよ、愛してると……

song 1 2

過去 part 3 (前書き)

亜由美目線です

song 1 2 過去 part 3

私には好きな人が2人います

その人は初恋の人

もう一人は……

高橋 昴

なぜか、初恋の人に似ている

そう、昔私は両親を事故で亡くした

ずっと一人ぼっちだった

でも、あの初恋の人が見つけてくれた

大好きな初恋の人

初恋の人の人の目絵で泣いてしまった

彼を困らせてしまったが………

彼は私を抱きしめてくれた

嬉しかった

そう、初恋の人に逢いたい

今、会えるのなら

伝えたい



好きっていう気持ちを・・・

好きです、永遠愛していますと

文化祭二日目

「ねえ、聞いた？昴君誰かに告白するつもりよ。」

つと小耳にはさんだ亜由美は……………

(誰に告白するの？もしかして真紀ちゃん？)

つと心の中で考えていた。

一方……………

( 今日こそ、佐藤に告白する。絶対に泣かせない )  
つと翼は思っていた。

告白の練習をしていた。

一方昴は……………

「あれ、水野じゃねえか。」

「やっぱり昴、亜由美に告白するの?」

「ああ。伝える。」



「あれ、昴君に、翼君？」

亜由美は不思議そうに見ていた。

「まずは、1 - 1 田中聡君。誰に告白するのですか？」

「1 - 6 水野真紀さんです。」

「え、あたし!?!」

「水野さん来てください。」

「水野さん、好きです、付き合ってください。」

「ごめんなさい、今そんな気分じゃないので。」

「あー残念でした。」

「次は・・・・・・・・・・1 - 5 藤村翼君です。」

（翼君誰に告白するんだろ？）

「誰に告白するんですか？」

「1 - 6 佐藤亜由美さんです。」

「えーーーーー私!？」

「佐藤さん来てください。」

「佐藤、お前の歌を聴いて一目ぼれした、付き合ってくれ。」

歓声がわいた。

「ごめんなさい、好きな人がいます。」

「翼君残念でした。」

最後は・・・

「1 - 6 高橋昂君です。」

(誰だろ？昂君が告白する人？)



っとまだ考えていた亜由美であった

最後の番が来た。

「1 - 6 高橋昂君です。」

観客が騒ぎ始めた。

「お静かに、昂君誰に告白するんですか？」

「1 - 6 佐藤亜由美さんです。」

「えーーーーー」

亜由美はかなり驚いていた。

混乱していた

(昴君の好きな人って私!?どうなってるの!)

「佐藤さん、大丈夫ですか?前に来てください。」

「亜由美、俺がお前の初恋の人だ、泣かせてごめんな。言いたくてもなかなか言えなかったんだ。」

「でも、俺はお前のこと好きだ、愛している、付き合ってくれないか?」

亜由美はとたんに泣き始めた。

「何よ、言つてよ、ずっと好きだったんだから。私ねどんだけ初恋の人昂君じゃないか考えて

たんだよ。ずっと。だから付き合ってください。」

「亜由美……………」

目の前でキスをした。

甘いキスを……………

「なんとこれはすごいラブラブですね。」

「こうやって告白大会は終わった」

亜由美と昴は恋人同士になった。

（放課後）

「ねえ、亜由美、昴君の初恋の人って本当なの？」

「うん。恥ずかしいな。」

「おい、高橋、亜由美ちゃんの初恋の人ってお前かよ。」

「ああ。そうだけど何か？」

昴はご機嫌斜めだった。

く帰り道く

「亜由美、昴また明日ね。」

「うん、真紀ちゃん。バイバイ。」

「またな。」

そういつて真紀は一人帰って行った。

「亜由美、本当にごめんな。」

「いいよ、でも嬉しかった。」

「何で？」

「だって、自分にモヤモヤしてたし、あの前で告白されたのは正直驚いたけど……」

「だよな、翼に勝負受けてたんだ。」

「え？」

「翼に亜由美を泣かせてたところ見られたんだ。んで、勝負しろって言われたんだ。」

「そうだったんだ。」

「なあ、亜由美、俺の彼女になって後悔してないか？」

「ぜんぜん、むしろ嬉しいよ。」

「そうか、ありがとう。」

「亜由美、歌ってくれないか？」

「うん。」



「空はきれいだね  
君と見ている空は  
とてもきれいだね  
優しさに包まれた空はとてもきれいだね」

「やっぱり、亜由美の歌は最高だ。」

「ありがとう。そういつてくれると嬉しいよ。」

昴と亜由美はキスをした

甘い、甘い時間の中のキスを・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4547z/>

---

歌よ届け大切なあなたに

2011年12月24日09時51分発行